

PROGRAM

武満 徹：
フロム・ミー・フローズ・ホワット・ユー・コール・タイム
～5人の打楽器奏者とオーケストラのための

Toru Takemitsu: From Me Flows What You Call Time ~for five percussionists and Orchestra

— 休 憩 — Intermission

ホルスト: 組曲「惑星」 op. 32

Gustav Holst: "The Planets" Suite, op. 32

- I. 火 星: 戦いをもたらすもの Mars, the Bringer of War
- II. 金 星: 平和をもたらすもの Venus, the Bringer of Peace
- III. 水 星: 翼のある使者 Mercury, the Winged Messenger
- IV. 木 星: 喜びをもたらすもの Jupiter, the Bringer of Jollity
- V. 土 星: 老いをもたらすもの Saturn, the Bringer of Old Age
- VI. 天王星: 魔術師 Uranus, the Magician
- VII. 海王星: 神秘家 Neptune, the Mystic

指揮・芸術監督: 佐渡 裕 Yutaka Sado, Conductor & Artistic Director

パーカッション: ネクサス Nexus, Percussion

女 声 合 唱: 神戸市混声合唱団 Kobe City Philharmonic Chorus, Female Chorus

合 唱 指 揮: 矢澤 定明 Sadaaki Yazawa, Chorus Master

管 弦 楽: 兵庫芸術文化センター管弦楽団 Hyogo Performing Arts Center Orchestra

2010 9/10(金)・11(土)・12(日) 3:00PM 開演
兵庫県立芸術文化センター KOBELCO 大ホール

主催: 兵庫県、兵庫県立芸術文化センター



平成22年度文化庁芸術拠点形成事業

3分ですぐわかる 今回の聴きどころ

壮観なフル・オーケストラの可能性を、目と耳で楽しむ2つの名作

シーズンの幕開けを告げる今回のコンサートは、仮にタイトルを付けるなら「オーケストラ・サウンドの色彩と愉悦」ということになるだろうか。珍しい打楽器が所狭しとステージに並ぶ武満作品も、4管編成にオルガンや女声合唱まで加わるホルスト作品も、普段のコンサートではなかなか目に(または耳に)することができない楽器のオンパレード。音色の多彩さにおいてもダイナミクス(音量の強弱)においても、オーケストラの広い可能性を証明する2曲なのだ。後半の「惑星」は7曲それぞれが別の性格をもっており、火花が散るような「火星」から荒涼としたモノトーンの世界を思わせる「海王星」まで、7枚の絵画を鑑賞するように楽しむことができるだろう。

日本固有の独特な時間の流れに、音の輝きや沈黙を見出す武満美学

20世紀の末期(1990年)に作曲された現代音楽であるため、聴く前から腰が引けている方がいらっしやるとしたら「武満作品は幻想的で美しい響きに満ちています」と申し上げたい。かつて彼は作曲の極意を「架空の庭園を連想してその中を歩き、ところどころで立ち止まりながら音を聴く」と表現したが、聴き手にはその庭園を個々が連想して追体験するという自由が許されるだろう。冒頭の、まるで尺八を思わせるフルート・ソロから始まるおよそ35分間は、音が佇み、そして静かに流れ、沈黙が訪れるといった時が繰り返される。武満の音楽には、龍安寺の石庭にも似た東洋的な味わいと美学(海外では「禅のような」とも評される)があるのだ。

オヤマダアツシ(音楽ライター)

PROGRAM NOTE

演奏をより深く楽しむために——曲目解説

オヤマダアツシ(音楽ライター)

武満 徹: フロム・ミー・フローズ・ホワット・ユー・コール・タイム

武満徹は音楽に宿るファンタジーを信じていた作曲家だ。たとえば彼は新しい作品を書くとき、題名を先に決めてしまいその印象から音楽を生み出すことが多かったという。彼の作品リストを俯瞰してみると「星」「夢」「水」「雨」といった言葉に目を奪われ、私たちは曲を聴く前から、題名によってさまざまなイメージをふくらませることができる。

また一方では「数のマジック」も作品のモチーフになった。アツシという名の四重奏団を念頭に「4」という数字を軸として作曲された「カトレーン」や、星から派生した五角形(ペンタゴン)と五音音階(ペンタトニック)をキーワードに生まれた「鳥は星形の庭に降りる」などがそれに当たる。1990年、ニューヨークの有名なカーネギー・ホールが100周年を迎えるにあたって委嘱された「フロム・ミー・フローズ・ホワット・ユー・コール・タイム」(タイトルはコラム「折々のうた」や多くの作品で知られる詩人・大岡信の詩より、一片を英訳したものは、「5」という数字が作品の要になっている。

まず、初演者でもある打楽器アンサンブル「ネクサス」は5人。曲の基本となるモチーフは、完全5度の範囲内にある5つの音。インスピレーションのひとつとなった

チベットの遊牧民による「風の馬」という占い(儀式)で掲げられる、「青・赤・黄・緑・白」という5色の旗。この5色は曼荼羅の中核を形成する五仏の色彩であり、「青=水、赤=火、黄=大地、緑=風、白=それらの統合であり空・空気・エーテル・無の象徴」を表現している。こうした巧妙な仕掛けは、風水や気功などで重視される超自然界の営みを連想させ(そういえば風水も<陰陽五行>の思想と関係が深い)、音楽がステージ上に気の流れを起こして、ホールの大気を浄化していくような印象を与えるかもしれない。そうした神秘こそ、海外において武満作品が注目を集める要因でもあるのだ。

全曲は休みなく続けて演奏されるが、次のような13のセクションから構成されている。聴く際のイメージをふくらませるきっかけになるかもしれないため記しておこう。[序/独奏者たちの登場/微風/予感/高原/環状の地平線/風が吹く/予感/蜃気楼/ひるがえる風の馬/約束の土地/生の歓びと悲しみ/祈り]。生まれては消える音楽に身を任せ、聴き手がそれぞれの想像力を駆使して<旅をする>ことになる。大きな自然を表現するオーケストラの中で、打楽器奏者たちは風・火・水のような形として現れ、また大地へと溶けこんでいくが、その場(=ホール)にいる全員が感覚を研ぎすまして体験をする音楽だ。作品全体に「祈り」の感情が脈々と流れていることも付記しておこう。

ネクサスの5人が演奏する打楽器は多種多様だが、いい音を得るならマンホールのフタも叩いてしまう彼らのこと。ベルの中に木製の“舌”があるという「パキスタン・ノア・ベル」等の新楽器を考案し、曲の世界観を創造している。初演は1990年10月19日、カーネギー・ホールにて。演奏はネクサス、小澤征爾指揮のボストン交響楽団。

おそらくは海外において、もっとも知名度および評価の高い日本の作曲家。称賛の声はオーケストラ曲をはじめとするコンサート作品にとどまらず、勅使河原宏や黒澤明の監督作品ほか多くの映画に付した音楽に対しても同様に寄せられ、さらにはロックやジャズ・ミュージシャンにも彼の信奉者は多い。またエッセイ等の執筆も多く、秘かに作曲していたという歌謡曲もあるなど「現代音楽の作曲家」という枠組みを必要としない音楽家である。その活動のほぼ全貌は「武満徹全集」(小学館)、「武満徹著作集」(新潮社)等でつぶさに辿ることができる。



歴史に名を刻む偉大なる作曲家

武満 徹(1930-1996)

Toru Takemitsu

ホルスト:組曲「惑星」 op.32

ホルストの代表作であり、吹奏楽も含めて多くの愛好家をもつ組曲「惑星」は、1913年に着想され1916年に完成している。インスピレーションの発端となったのは、当時のイギリスで注目されていた神秘主義、ホルスト自身がかなり詳しくあったという占星学、そしてローマ神話における神々。それゆえ、この曲を天文学や宇宙開発等のイメージに近づけるのは本来であるなら邪道であり、むしろホロスコープを叡智の縮図とする星占いと関連づけるほうが正道だと言えるだろう。ホルストは東洋哲学、特にインドの思想書に通じサンスクリット語の知識も有していたが、「惑星」は彼自身が作りあげた“人生哲学の書”であるのかもしれない。

さらには、ストラヴィンスキーのバレエ音楽「春の祭典」(1913年5月に初演)に代表されるオーケストラの大編成化や、作曲当時のヨーロッパを覆っていた第一次世界大戦の影なども、大きな影響を与えている。

第1曲「火星」 戦いをもたらすもの

4分の5拍子という不安定な鼓動、弦楽器のコル・レーニョ奏法(弓の柱部分で弦を叩く)が生み出す不気味な音、威圧的な金管楽器群の叫び。戦いと農耕の神マルス(=マーズ)をおそれ、不安と憎悪に満ちていた作曲時のヨーロッパを表現したとさえ言われる過激な音楽。

第2曲「金星」 平和をもたらすもの

弦楽器と木管楽器が中心となり、オーロラのように幻想的な音楽を展開。ヴァイオリンやチェロのソロ、チェレスタやグロッケンシュピールの煌めきなど、繊細なオーケストレーションが特徴。愛と美の女神ヴェヌス(=ヴィーナス)を讃美する官能的な音楽。

第3曲「水星」 翼のある使者

交響曲における軽快なスケルツォ楽章にあたり、賢人に宿る俊敏さと機知を表現。一方で「真夏の夜の夢」に登場するいたずら好きの妖精パックを思わせる。

第4曲「木星」 喜びをもたらすもの

天空の神ユピテル(=ジュピター)の偉大さを讃え、豊穡を祝う祭りのように陽気で、その雄大さと豪快さに圧倒される楽章。6本のホルンと弦楽による中間部の魅力的な旋律は、本田美奈子や平原綾香らによって歌われ、広く知られる。

第5曲「土星」 老いをもちたすもの

神秘的で思索的、そして長く生きる知患者の威厳。農耕の神サトゥルヌス(=サターン)に学ぶ達観。老いに対する恐怖を乗り越える人生訓としての音楽。

第6曲「天王星」 魔術師

4つの音による威圧的なファンファーレで始まる、4分の6拍子による力強いスケルツォ楽章。嬉々としながら世界を構築しているような「魔術師」の姿を彷彿とさせる舞曲。しばしば、デュカスの交響詩「魔法使いの弟子」と並んで評される。

第7曲「海王星」 神秘家

神秘と静寂に包まれたファンタジーと幻想世界。弱音器を付けた弦楽、2台のハーブ、オルガンのペダル音(低音)、バス・オーボエの不気味なつぶやき、舞台裏から聞こえるコーラス…。

全曲での公式初演は1920年11月、イギリスのロンドンにて。演奏はアルバート・コーツ指揮のロンドン交響楽団。ホルストも女声合唱の指揮で参加している。



歴史に名を刻む偉大なる作曲家

グスターヴ・ホルスト(1874-1934)

Gustav Holst

先輩格であるエルガーや盟友だったヴォーン・ウィリアムズらと並び、イギリスの20世紀音楽史を開いた作曲家の一人。その作風は後期ロマン派音楽や民族楽派の系譜に連なり、インド文学・哲学なども作曲の源泉にしている。また自らが地方を歩いて採譜した民謡のメロディを作品の中に活用し、そうした曲は吹奏楽愛好家や合唱愛好家に人気が高い。若い頃はオーケストラや吹奏楽団でトロンボーンを演奏し、後半生はロンドンのセント・ポール女学校やモーリー・カレッジ等で音楽師範(Director of Music)を務めながら作曲活動を続けた。